

教育研究グループ「研究結果」報告書

報告日 令和3年3月31日

グループ名	多摩社会科勉強会	フリガナ 代表者氏名	ながお りゅうた 長尾 隆太
学校名 (代表者)	府中市立府中第三中学校	電話番号	042-361-9303
研究テーマ	「見方・考え方を働かせた深い学びを実現する社会科指導の工夫」		
研究期間	令和2年5月1日 から 令和3年3月31日 まで		
研究結果 の概要	コロナ禍という状況の中、オンライン開催を全4回のうち2回行った。自宅からの参加が可能になり、北海道等の遠隔地、大学からの参加者がいた。各地域とも研修会が中止になっており、情報交換や授業について意見交換をする機会が非常に少なかったため、悩みを含めて、協議できた。 新学習指導要領全面実施を前に、「単元を貫く課題」「新しい評価の観点」や、GIGAスクール構想における授業改善の方法等先進的な事例紹介が多くあり、実践的な指導方法の工夫に結びつけるきっかけとなった。 また、毎回、全国中学校社会科教育研究会元会会長を顧問の先生とし、指導を仰いでおり、より専門的なアドバイスをいただくことできている。都中社研研究部員をはじめ、指導教諭等も参加しており、若手教員への指導の場となっている。 今後は、新学習指導要領における新しい評価の観点についての具体的実践例や「単元を貫く課題」を設定した単元の構造図づくりについて全員で研究をしていく。		
※詳細は別 紙により 報告	(1) タブレット端末の活用の長所は、瞬時に大容量の情報が全員にいきわたることである。瞬時に情報を全員で共有することにより、話し合い活動が活発になり、思考する時間が多く生み出されるという利点がある。また、学校運営上、活用方法について教え合うことで教員間の交流がうまれるというメリットも指摘された。一方、生徒の健康への被害、情報モラルの課題もある。また、教師の役割は何なのかという本質的な課題にもつながる。 (2) 新しい評価の観点である「学びに向かう力」について、ポートフォリオ形式で行う評価方法、単元を見通した指導・評価計画の必要性、適切で信頼される評価となるための工夫等が挙げられた。		
その他 特記事項			

「見方・考え方を働かせた深い学びを実現する社会科指導の工夫」(報告)

【研究の内容】

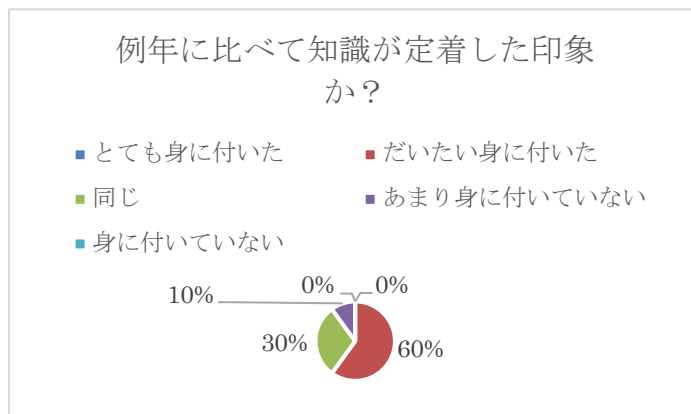
第1回 8月23日(日)(Zoomによる会議)

1 情報交換と協議

(1) 令和2年度の1学期の各校の様子について情報交換

(ア)休校中の課題について

- ・復習課題：特に1年生は、中学校の授業を経験していないため、小学校の復習など範囲が限られる場合があった。
- ・予習課題：教科書を読んで、語句を埋める課題のほか、教科書の課題として挙げられているような思考を問うものも予習として取り上げた。



左記は、会員の印象である。「だいたい身に付いた」「同じ」が9割を占めており、各校で、学力を低下させない課題の工夫がなされたことがわかった。

(イ) 再開後の授業の工夫

- ・感染症と人間の歴史、新型コロナウイルス感染症に関する新聞の読み取り等社会科として触れた授業例が紹介された。

(2) 発表報告

①「法に関する教育」指導案について紹介があり、協議した。

*会員の協議方法について、Zoomの機能を使うことで、指導者として活用する方法を学んだ。

②「user local」の紹介

「AI テキストマイニング」機能を使うことで、生徒の「学びに向かう姿勢」が評価できる

第2回 10月25日(日)(Zoomによる会議)

1 情報交換と協議

(1)2学期前半の各校の様子について情報交換

2 発表報告

(1)福井県東京事務所(福井県教育庁義務教育課)吉川あき子先生の発表

吉川あき子先生指導の「世界から見た日本の人口」動画から

<参加者から>

- ・導入がクイズから始まり、生徒の興味関心を高めている。
- ・内発的動機付けを与えている導入。
- ・資料が多く、また数字がイメージしやすいような色分けや例が具体的。
- ・表やグラフ(人口ピラミッド等)の読み取りの基礎が徹底されている。
- ・動画であるが、「作業」の指示もあり、技能習得の工夫がされている。
- ・1つの資料に対して1つずつ発問されており、根拠を生徒自身説明できるようになっている。
- ・世界と日本が常に対比されている。
- ・「考えてみましょう」が10分間で9回あり、考えさせる工夫がされている。また考える根拠とな

る資料が明確に示されている。考える時間も確保されている。

- ・自学しやすいように、めあてや準備するものが最初に示されている。

<協議から>

＊「考えてみましょう」のところで答えがしめされていない→簡単に答えを出さないことも大切ではないか。

＊この単元の後、3年生で「国際社会」につなげることが可能ではないか。例えば「アフリカの人口が多くなることが予想される。先進国の人たちは人口抑制を進言しているが、アフリカの人たちは発展のため人口増を希望している。あなたは賛成か反対か」等。

＊「RESAS」（リーサス、地域経済分析）というサイトがあり、その中に「人口マップ」というのがある。活用するとさらに広がるのではないか。

(2)「ICT を活用した協働的探究学習」国立市立国立第一中学校 古田一博先生の実践から

協働的探究学習におけるICT介在のモデル(概念図)



単元「私たちがつくる持続可能な世界」から

・「国際社会」の単元として、7月から実態把握→9月の授業実践。「Google form」で生徒の変容を把握。

・単元終了後の効果測定として、「User Local」の「テキストマイニング」を活用。

・KJ法を使ったポスターセッションと Google スライドを使った発表の2回を行った。

・論理的思考力による発表と批判的思考力による意見質疑を行った。

・インターネットを使った調べ学習。

<参加者から>

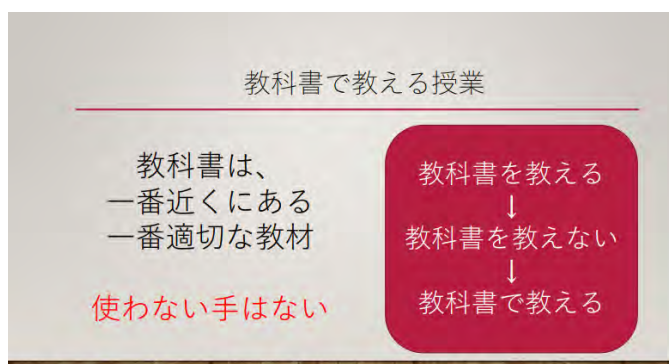
・ICT デジタルと従前のアナログとをうまく組み合わせたい

る。

- ・テキストマイニングは、研修会で使うと有効かもしれない。
- ・生徒の変容をテキストマイニングで見るのは、授業改善につながり、有効。

(3)「教科書で教える授業とは」板橋区立赤塚第二中学校 中野英水先生の実践から

単元「中国・四国地方」第2時「交通網の整備と人々の生活の変化」



- ・教科書にある資料をどのように読み解いていくのかが大切。
- ・単元構成を考える際に、ストーリーができていて良い。
- ・読み解く力は、資料を基に思考する力。

学習指導要領による評価の考え方について

<質問、協議から>

- ・ワークシート等に記入させる部分とテストで評価する部分とのバランスが難しい。
- テストは知識技能中心で良いのではないか。個での学びとなる。テストで思考を問うとしたら「〇〇について、根拠を示して、100字以内に書きなさい」という問題あり。
- *単元内の個人内評価について
 - ・ワークシートに振り返りを書かせる。コメントを書いて返却
 - ・1人1人への声かけ「よく気が付いたね」等
 - ・面談前に各教科から集めるコメントに書き、担任から伝えてもらう方法
- *個人内評価は、負担にならない範囲でやるのが良いのではないか。
- *評価とは、授業改善と、生徒自身の振り返りの両面がある。

第3回 12月26日(土)(対面開催)

1 研究報告

(1)福井県東京事務所(福井県教育庁義務教育課)吉川あき子先生の発表

(2)国立市立国立第一中学校 古田一博先生の実践から

②「南アメリカ州」の実践報告

地理的分野実践

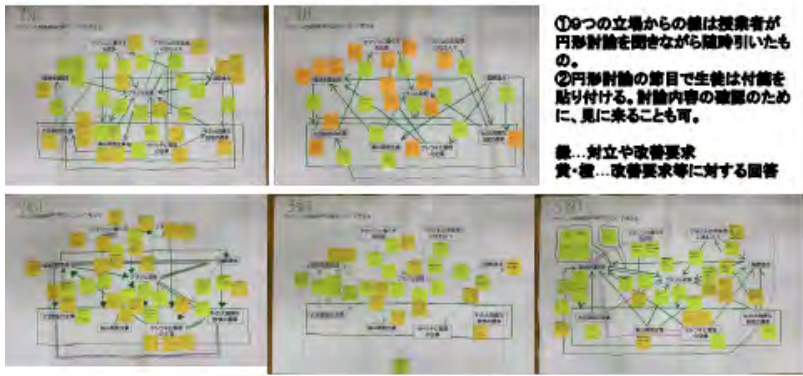
単元指導計画

	学習内容・活動
第1時	南アメリカ州の自然環境(プリント・板書)
第2時	南アメリカ州の農業と環境(プリント・板書)
第3時	熱帯雨林の減少について(プリント・ノート考え) ※9つの立場に分ける。個人で意見や主張について考察
第4時	立場毎にグループで意見・主張を共有する ※連携・協力したい立場へのアプローチ
第5時	①円形討論 開発や規制への反対意見などを主張(45分)
第6時	②円形討論 開発や規制への反対意見などを主張(30分) →学習活動の振り返り(20分)、模造紙振り返り・解説
第7時	単元の感想・意見を記入・提出 個人発表・意見交換

【事前学習】SDGsの冊子を活用し、夏休みの課題とした。

【立場】

- ・市街地住民
- ・先住民
- ・鉱山開発企業
- ・大豆栽培企業
- ・サトウキビ栽培企業
- ・牛の大規模放牧企業
- ・ブラジル政府
- ・国際連合
- ・環境保護団体



【円形討論】(2時間)

- ・ 討論の時間に、相手へ改善を要求する付せん等を張り付ける。
- ・ 矢印は、それぞれの立場を授業者が書く

(3)「身近な地域の学習一昔の学校周辺の歴史」

調布市立第四中学校 市川敦子先生の実践から

単元「身近な地域の歴史」(1年歴史的分野)

<質問、協議から>

* 地図を重ねる方法について

→ ICTを活用するのも1つの方法

* 地域調査について

→ 3年間を通して、3つの分野で行うことが大切。

地域の在り方について考えさせることが大切。

→ 本校の周りではこのような状況であるが、ほかの地域は？など他へ広げていくのも1つの方法。

* 地歴融合の単元はどのようにつくっていったら良いのか

→ 地域の歴史を考える中で、地理的分野で扱うのは1つの方法ではないか。

どの時代とするのかは、地域の実情に合わせる。

資料が揃う、特徴がわかる時代が良い。

最後は、公民的分野の地方自治に結びつけるのが良いのではないか

→ 授業で意図的に結びつける方法もあるのでは。

年間指導計画に計画的に位置づけることが大切。

(4)小型インタラクティブ地球儀「SPHERE(スフィア)」の活用について

板橋区立赤塚第二中学校 中野英水先生の実践から

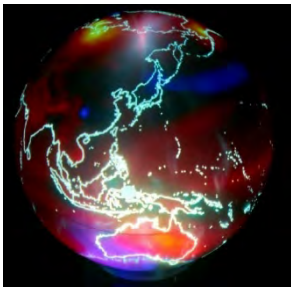
①「よりよい社会を目指して」(公民的分野)



- ・ 「地球をかたどった立体」が最大の特徴
- ・ 地球で起こっていることを臨場感をもって提示できる

【SDG s との関連】

- ・ S P H E R E を使って情報収集
- ・ 地球温暖化等の課題について調べ学習
→ S P H E R E を使って発表
- ・ コンテンツの中に SDG s に関するものが多数ある



②「開発の環境・対立ではなく両立—環境保全を中核とした近畿地方の学習を生かして」

- ・環境と開発のバランスを帯グラフにして考える
- ・「今の自分にできること」として「環境と開発の両立・行動宣言」を最後に書かせた。

<質問、協議から>

*「教材教具に語らせる」

- 教材教具をつかって何を考えさせたかが重要。教材は目標を達成させるためのもの。
- グループ学習活動も同様。活動が目的、目標になってはいけない。
- 「SPHERE」を使って未来予想図をデータで見せて考えさせるか、未来予想図を授業そのもので考えさせるのかは、授業者の考えで良い。

第4回 3月20日(土)(対面開催)

1 研究報告

(1)調布市立第四中学校 市川敦子先生の実践から 「南アメリカ州」

<協議から>

- *地理の授業は、雨温図、地図の指導が基本。特に雨温図などは、データに基づいて実際に書かせることが重要。作成させることで、情報を読みとる力が育成される。
- ・雨温図は、東京と比較することが重要。

(2)福井県東京事務所(福井県教育庁義務教育課)吉川あき子先生の発表

(3)杉並区立泉南中学校 長井利光先生の実践から

構想する授業

「白村江の戦いを受けて、日本はこれからどのような国をつくるべきだったのだろうか」

<単元を貫く課題> (古代)

「白村江の戦いを受けて、日本はこれからどのような国をつくるべきだったのだろうか」

<指導の工夫>

- ・東アジアとの関係に着目させる。
- ・「主体的に取り組む態度」を評価するために、あらかじめ評価規準を示した。
- ・ポートフォリオの活用で「学びを調整」していく。第1時に「どうなるか」と予想させ、途中でもう一度同じ問いについて書かせる等。
- ・「構想」に至る授業では、「当時の人たちは、史実のように本当に考えていたのか」という問いをする。

<質問、協議から>

*「知識」を教える→「知識」を基に思考させる。

*その上で、なぜそうなったのかについて根拠を考えさせる。

*ワークシートの記述についての評価

→最初にB基準を示す。B基準を決め、伝えるのが教師の役割。

→知識が理解されているか、気付かせたい要素が入っているか

*評価について

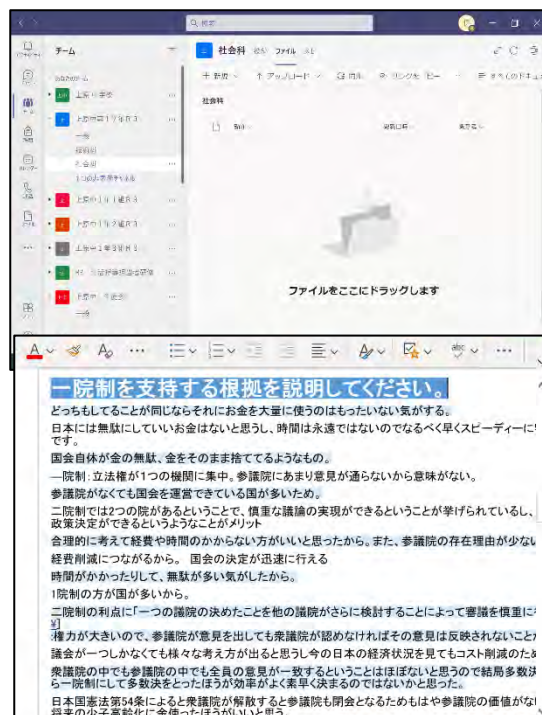
- ・「何を指導しているか」「何を評価しているか」は一体化すべき。指導と評価の一体化である。
- ・ユニバーサルデザインの授業設計という観点から、単元計画を示すことは大切。生徒へ見通しを示す。

- ・教科別に通知表を作成し、生徒へ示すのも1つの方法

(4) 渋谷区立上原中学校 伊藤郷先生の実践から

渋谷区における GIGA スクール構想下の授業について

- ・Microsoft Teams を日常的に活用している。学年の生徒全員が入ったチームを作り、授業プリント等の資料を共有している。また、学年の生徒全員で同じ課題に取り組むことができる。
- ・Microsoft Forms：投票機能を使うことで、課題や発問に対する生徒の意見を瞬時に収集、共有できる。
- ・UserLocal テキストマイニング：生徒の書いた文書进行分析。生徒自身の振り返りにもなる。
- ・ベネッセのミライシード：ドリルパークというアプリを知識の定着に活用している。正答率 100%になるまで各自でドリルに取り組むことを課題とする。基礎的な知識は家庭学習で身に付けさせる。



(6) 板橋区立赤塚第二中学校 中野英水先生の実践から

「身近な地域の調査(地域の在り方)」タブレット端末を活用して

① デジタルワークシートの活用

- ・Google classroom を活用
- ・GIS の活用。「Google map」は巡検の補充として活用。「地理院地図」「今昔 map」「重ねるハザードマップ」の活用。

② スライドによる学習のまとめ。 Googleslide を使って、グループによる発表会 <協議から>

① 「地域の在り方」の指導

- ・地域を知らないという課題設定はできないので、身近な地域学習で行うことが適当か。
- ・類似の地域について調べ直すのも1つの方法。課題を捉えて、身近な地域に当てはめる方法
- ・身近な地域を題材にすると、皆同じような類似地域になってしまう課題はある。

【成果と課題】

(1) 成果

- ① コロナ禍という状況の中、オンライン開催を2回行った。自宅からの参加が可能になり、北海道等の遠隔地、大学からの参加者がおり、有意義であった。また、各地域とも研修会が中止になっており、情報交換や授業について意見交換をする機会が非常に少なかった1年間であった。そのため、このような勉強会の存在が貴重であり、悩みを含めて、情報交換できたのは有意義であった。
- ② タブレット端末の活用の長所は、瞬時に大容量の情報が全員にいきわたることである。全員で共有することにより、話し合い活動が活発になり、思考する時間が多く生み出されるという利点がある。また、学校運営上、活用方法について教え合うことで教員間の交流がうまれるというメリットも指摘された。一方、生徒の健康への被害、情報モラルの課題もある。また、教師の役割は何なのかという本質的な課題にもつながる。
- ③ 新しい評価の観点である「学びに向かう力」については、様々な事例が紹介された。ポートフォ

リオ形式で行う評価方法の工夫、単元を見通した指導・評価計画の必要性、適切で信頼される評価となるための工夫等が挙げられた。

(2)課題

- ①コロナ禍において、対面での開催が非常に困難な状況である。どのように安全な会の運営ができるか来年度も模索していく必要がある。
- ②新しい評価の観点については、十分に理解が深まったとは言い難い。各地域での研修会の機会が減っている中、本会の重要性は高まっていると言える。
- ③「聞く」だけでなく、「参加する」ことが何より大切である。そのため、共通の課題を提示し、その場で協議し、指導案を作成するなどの工夫も図る必要がある。